

学習支援・教育開発センター一年報 第13号の発刊によせて

学習支援・教育開発センター所長 岡田幸宏

今年度も学習支援・教育開発センター一年報の発刊が無事にできましたことを当センターの所長として心から嬉しく思っております。

今回お送りする年報も、昨年度に引き続き、学習支援・教育開発センターがいかに新型コロナウイルスと対峙してきたかの記録といえます。

2020年度、2021年度と、2年間にわたって全国の大学は、新型コロナウイルスへの対応のために文字通り右往左往してきました。本学もちろんその例外ではありませんでした。ただ、大学への入構すら制限されたり、ほとんどの授業がオンラインで行われていたコロナ禍1年目と比べると、2年目となった2021年度は、対面授業も増えてキャンパスに学生達も戻ってきました。そのような中で、ポストコロナへの対応を議論する余裕も大学では生まれてきたように思います。

この2年間は、未知のウイルスに抗して、学生や教職員の健康を第一に考えつつ、学生に対してどうすれば最善の教育と学びを提供できるかに腐心してきました。当センターも、本学の教育支援機構における一組織として、何ができるのか、何をしなければいけないのかを、ひたむきに考えてきました。

今号の年報も、当センターがコロナ禍と向き合って何をしてきたのかについてしっかりとした記録を残す必要があるといった視点から編纂されています。当センターの教職員やラーニング・アシスタントであった大学院生に、2021年度には、何を考えたのか、何ができたのか、そして何ができなかったのかを自由に執筆してもらい、そのような論稿が中核をなしています。その結果、コロナ禍だからこそできた、言い換えれば、ピンチをチャンスに変えた多くの取組が、記録として本号には書き留められています。

この年報において、コロナ禍という逆境の中においても将来の展望も見据えていた当センターの姿勢と今後の展開への意思を読み取っていただければ幸いです。